

笛を吹く画家

串田孫一



串田孫一

笛を吹く画家

文京書房

笛を吹く画家

一九八六年十月二五日 第一刷発行

著者 串田孫一

発行者 高澤 邵

発行所 文京書房

東京都渋谷区幡ヶ谷一―一三
電話 (〇三) 三七八―〇〇九六
振替 東京 三一―三五〇四九

印刷・製本 凸版印刷株式会社

1986© Magoichi Kushida

目 次

工房	中庭	運河	朝靄	聖家族	色名帖	転居	季節はずれの歌	影法師	鋏	田園詩	地球	綻び	流転幻想	笛を吹く画家
----	----	----	----	-----	-----	----	---------	-----	---	-----	----	----	------	--------

54	51	48	45	42	39	36	32	29	26	23	20	17	13	9
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	---

巴里祭	57
蓮池	59
懺悔	61
夏草	63
愛の悪魔	65
牛の声・人の言葉	67
壺笛	69
留守番	71
静物画	73
音	75
金の烏賊	77
篆刻の悪戯	79
木の首	84
珈琲泥棒	86
豫言者	88

曲り角	91
裏通りの家	94
牡蠣を食べる老女	97
扇風機	101
考える人	103
深刻な話と赤い花	105
芝生	107
地上の楽園	110
木の度量	112
珊瑚樹	115
上野の山の日の出	119
歳月	123
理想郷	132
図書館	135
椰子の実	138

紙細工

改札口

伊呂波歌

羲和

美しい年輪

古風な置時計

邂逅

永劫の眩き

春日遅々

封を切らない手紙

傷ついた雀に托して

ヴァイオリンを弾く猫

覚書

189

185

180

176

172

168

164

160

155

151

147

144

141

口絵 眞垣武勝
装幀 串田孫一

笛を吹く画家

笛を吹く画家

今はそのあたりも、コンクリートの塀を繞らした住宅が建てこんで、もう空いている土地などはなくなってしまったが、その頃は少し大袈裟に言えば見渡す限りの畑であった。麦の畑からは雲雀が何羽も舞い上り、葱畑の上には羽化したばかりの青条鳳蝶アサギアゲハが飛んでいた。畑ばかりでなく、何にも使われていない可なり広い草地さえあり、それに続く丘陵の大半は雑木林であった。

私はこの田園風景が好きで、その近くに住む友人をよく訪ねた。

仕事の邪魔をしているとはっきり分かっていても、ついつい喋り込んでしまうこともあったが、私は彼を訪ねる時には、肩に掛けられる雑糞に双眼鏡、拡大鏡、小型の帳面の類を入れて行き、畑や丘の道を歩き、時には雑木林に踏み込んで、植物を見て歩き、昆虫を探し、鳥が囀りはじめれば双眼鏡の焦点をそのあたりに合せた。詰り自然の勉強のためにそこを屢々訪れていた。

或る時、丘を反対側に下って見た。そこも似たような草原と林が続いていたが、丘の上からは更に遠くのもっと広大な丘陵地帯が見渡せて、一層田園的雰囲気アットモーションの深い眺望であった。自分に自由とゆとりがあれば、思い切って移り住んでしまいたい欲望にかられ、自然の勉強は休憩にして、うっとりと秋の陽射の中にいた。

その時、右手の櫟林の方からフルートの音が聞こえて来た。私は最初自分の耳を半ば疑った。そんな筈はないと思った。自分がこの景色に見蕩れていい気分になっているので、それに相応しい音楽を空想しているうちに、実際に笛の音が聞こえて来たように思い込んでしまったのではあるまいか。そう思った。然しそれは実際の音であった。

私の耳に達したそれが何の曲であったか、或いは練習曲の一部分の繰返しであったのか、もうそれから三十数年もたっているのに、正直に言えば記憶にないと書かなければならない。然し、ひょっとすると、それが日暮雅信の「サキソフォーンのためのロマンス」であったような気がする。と言っても、その当時私自身がこの曲を知っていた訳ではない。

*

次に私が友人を訪ねた時に、丘の向う側へ下りて行ったらフルートを吹いている人がいたと話をすると、その人なら知っているから一緒に行ってみようと、躊躇する私に構わず仕度をしはじめた。そして道々その人の話を聞いたのであるが、何かぼんやりと記憶に残っている名前の画家であった。

秋の、木々の葉は色着いてもまだ散り出す前で、すぐ近くまで近寄らないと、櫟林の中の画家の家は見えなかった。大工任せでなく、大工に手伝わせて自分で建てた家は、そのあたりの環境にもよく合っていたし、まだその人柄を全く知らない画家の、内面の生活が素朴な形で投影されているように思えた。画室と居間とを兼ねた一人暮らしの部屋で私たちは小一時間は話をしたと思うが、口数の極めて少ないその人は、絵のことで気に懸ることもあるのか、かなり不機嫌であるように見えた。そしてフルート

のことも話題にしてみたが、手製の白ペンキ塗りの譜面台と、そこに置かれた一本のフルートがあるだけで、それについての話は全く聞くことが出来なかった。

そんな最初の訪問のことを考えると、私としてももう二度とこの画家を訪ねるようなことはあるまいと思ったのに、人間の附合いというのは判らないもので、私はその後屢々彼を訪ねるようになり、木瓜の実で作ったと言うお酒をすすめられながら、興味深く聴こうとする私を前に、ヘンデルだのモーツァルトだの、或いはサン・サーンスを吹いてくれた。

それは何れもソナタの一部分であったり、二重奏曲の或るメロディーを辿るようなものであって、上手な演奏というには程遠いものだったが、ほんの二メートルとは離れていないところでフルートを聴く機会のなかった私はすっかり満足をした。そして私の願いに応えてフルートを吹いて呉れる画家はいつも機嫌がよく、にこやかな会話が笛と笛との間の時間を埋めた。

朝早く、よく晴れた日にこのヴェラティーニのアレグロを練習していると、窓のすぐそこまで小鳥がやって来て、おとなしく聴いていると言った画家の、嬉しさと恥かしさとまじり合った上機嫌の顔は今もはっきり想い出すことが出来る。だがその顔を想い出すたびに、寂しさが胸にひろがる。

どうしてこの画家はフルートを吹いたのか。そんなことを訊ねてみたところで何にもならない。絵は彼の楽しみごとでは無論ない。鋸や金槌を使って絶えず家の修理をしたり、一部分の改築を思いついたりするのは、制作のための好条件を整えるためである。ということから、笛を吹くことは彼の気晴らしだと考えるべきだが、同じ一人の人間のすることであれば、それも何処か意識の蔭で繋がりに違いない。

そんなことよりも、その画家の画室で、勿論肝心の絵を見せて貰うことも忘れはしなかったし、小旅行の後の、淡彩のほどこされた何冊もの画帳の、絵としての整いを得る以前の写生が楽しかった。そういうものまで見せて貰える間柄になり、フルートを通じての音楽についての彼の断想からも、次第に心に響く味わいを汲み取れるようになった。そして部屋の上に積まれた楽譜からも、フルートについての知識を得た。

今その楽譜の大部分が私の手許にある。もう笛を鳴らすような息が自分にはなくなった、君のリコーダーでも吹けるものがあるかも知れない、形見に貰ってくれということだった。楽譜の表紙に油絵具のこびりついているものが何冊もある。

画家は亡くなった。その二日程前に病床に見舞った友人の話だと、これから自分は月へ行く、自分が暫く地球にいたことは、その間に描いた絵が証明するだろうと語ったそうである。

亡くなった晩に、私は自分の笛を出して、形見の楽譜を串いのつもりで辿っていたが、その間から「サキソフォーンのためのロマンス」が出て来た。僅か三十二小節の曲であるが、まだこの画家に会う前に、あの雑木林の奥から聞こえて来たのは、どうもこの曲だったような気がして来た。

流転幻想

海が見たくなかった。年に一回か二回、海が見たくなる。その都度海を見て来て満ち足りた気分になるという訳ではない。今やり掛けの仕事が一段落したらなどと思っているうちにその気持も鎮まり、いつとはなしに忘れてしまうことの方が遙かに多い。

だが今度は、海が見たいと思ったのが眠り際で、その晩ひと晩眠って目が覚めた時にはきれいさっぱりと忘れてしまうだろうと思っていたところ、忘れどころか、夜が明ける前に目が覚め、それと同時に、そうだ、こんなに早く目を覚ましたのは海を見に行くためだったと思いながら、急いで仕度をして出掛けた。

早朝の、座席の沢山あいている電車に乗ってから、さてどこまで行こうかと考えた。それはまだ決まなくともいいと思うと、今度は態々こんなに早く家を出て海を見に行く自分の気持を見詰めた。時々、海が見たくなると言う人に会うことがあるから、これは自分だけの特別の気持ではない。そしてその人達がそんな時に実際に海を見に行っているかどうかは知らない。また仮りにその人達が、海辺の町に生まれ育ったとか、海と特別に深い関係があるというのならともかく、それはただ漠然とした、それだけでかなり烈しい欲求であるのが推察出来ると、人間の隠されている何かと海との関係にまで推理が広

がって行きそうになり、これは一応中断した。

*

電車を乗換え、窓から見える工場の屋根の向うに起重機の鉄柱や造船場の船渠らしいもののある、港に近い駅で下車した。その時自分は、明るく広々として波の穏やかな春の海を特に見たいとは思っていなかったことに気が附いた。そしてここまで来ても、まだ時刻は早く、港で働く人達の姿は殆ど見えなかった。

岸壁へ出ると向うは海だった。磯はどこにもないのに磯の匂いがした。油だの、塗料だの、さまざま混り合った海の匂いであった。不純な匂いであるから餘計それを海の匂いとして感じ、例えば波が時々静かに寄せる砂浜に立っても、これ程強く海の匂いを嗅ぐことは出来なかったと思う。

岸壁のへりを歩いて行くと、片側に並ぶ倉庫の途切れるあたりに、幅の狭いコンクリートの階段が海に向かって造られていた。それを下って行くと海が揺れていて、階段はなおその下へと続いていた。勿論海の底まで続いている筈はないが、海底にひろがる別の世界への入口のような気もした。私は足許に気を配りながら慎重に一段一段下りて海水に手を入れた。思った程の冷たさではなかった。途中まで戻り、日のあたり出したコンクリートの壁に寄りかかるようにしてその階段に腰を下ろした。そしてこれで自分の得体の知れない要求が満たされたように思い、その日最初の煙草に火をつけた。

何噸ぐらいあるのか大して大きくはない貨物船が、少し傾いて目の前にあった。蹲るように妙なところに腰掛けている私の餘り近くにあったせいか、幾ら見えても船が浮かんでいるようには感じなかつ